



ふたたび人生の転機をむかえて

鳥根大学の菅原庄吾先生からバトンをいただきました。東京大学の佐藤宗太と申します。菅原先生とは、今年、愛媛で開催された討論会で仲良くさせていただき、深夜にシジミラーメンを食べながら宍道湖のシジミのご研究について興味深いお話を伺ったことを思い出します。学会に赴いて対面でお会いできたからこそその出会い、大切にしたいと思っています。

半年が過ぎた今、愛媛では想像もしなかった人生の転機をむかえ、明日から職種を変えるタイミングで筆をとっており、研究者人生を振り返っています。

思い返せば、中学の理科・高校の化学の恩師に研究の楽しさに気づかせてもらい、大学教員として化学の研究の道に入りました。有機/錯体合成化学に携わる中で、化学にとどまらず、生物・物理・数学・地球科学・薬学そして分析化学、と幅広い大学研究者との共同研究にのめり込み、異分野融合の重要性と楽しさを実感し、たくさんの共著論文を発表させていただきました。

10年ほど前、自分にしかできない研究を、という強い思いから、不安定ではあるけれど大規模な国家プロジェクトに携われる特任教員として、構造有機化学の分野に飛び移りました。分子構造解析を武器として、材料科学と分子科学をがっちりつなぐ研究を展開できました。今まで知らなかった学会に参加し、多くの初めて知る研究者と出会い、異分野・異文化の楽しさを感じることができました。

コロナ禍が始まった頃、もっと異質な分野との連携に魅力を感じ、東京大学社会連携講座「統合分子構造解析講座」の特任教授（今日までが現職）として、二十社におよぶ企業との産学連携活動に飛び移りました。大学とはだいぶ異なる企業の文化、しかも各社ごとに異なる文化との出会いは衝撃的でした。各社の研究に対する思惑はバラバラで、綿密に連絡をとり合う企業側研究者が百数十人にもものぼり、各社に赴いて皆様に対面でお会いすることで、はじめて信頼関係を深め、仲良くなれたと感じています。講座参画企業のうち数社はJASIS（分析機器・科学機器総合展）に出展しており、分析化学との親和性が高まった中、ありがたいつながりを持たせていただき、本誌2023年12月号「こんにちは」欄にて当講座をご紹介いただき、日本分析化学会にも入会させていただくことになりました。

研究面では、講座参画全社と進める非競争領域の研究、複数社と複数大学との共同研究、1対1の競争領域の研究を同時進行させながら、法務や知財戦略にも携わ

り、社会実装の成果が得られた際には積極的に広報することができた、充実した活動でした。教育面では、産学連携の成果を「産学連携で」アウトリーチ活動し、すぐ先の次世代を担う中高生が、リアルな研究の楽しさに触れる機会を設けられたと思っています。特に、昨年の名古屋工業大学で開催された年会でポスター発表したSSH（スーパーサイエンスハイスクール）校の生徒たちとは、彼らの探求学習を最先端の分析機器・解析知見でサポートする活動へと発展し、数多くの受賞に至ったこと、わが生徒のように嬉しかったです。対面でお会いできる学会の重要性を実感しました。

東京大学での特任教員としての雇用が通算10年に迫る中、無期転換できるポジションは無いために次の職について考えました。この制度が日本の科学技術・イノベーション創出にどれほどの貢献/損失をもたらしているか、不安定な有期で雇われながら嵐レベルの逆風の中をノーブレイクで駆け抜けることに心を決めた特任教員としては構ってられないので、ふたたびむかえた人生の転機にあたり、自分がどうあるべきか、に焦点をあてて悩みました。もちろん、ありきたりに大学や国研の研究職にも応募しましたし、そもそも採用されるか大きな不安もありました。自分にしかできない研究を中核に、大規模な産学連携や異分野の研究者・人とのつながりの醸成の実績、教育活動を活かすことが幸せな人生に大事な要素なのかな？ と思い定めました。

今日までは、産業界に一番近いアカデミアのポジションにいました。明日からは、アカデミアに一番近い産業界のポジションに、ふたたび飛び移ることにいたしました。人生で何度目かの異分野・異文化、人生初の異業種のお仕事ですが、ありがたいつながりを通じ、私にベストフィットした特殊なポジションと一緒に練って、超豪速でお認めいただきました。明日からも逆風の中、ちょっと怖い気持ちもあるけれど、楽しくパワフルに、日本の、ひいては世界の明るい分析化学の未来にむかい、まっしぐらに駆け抜けます！

今回は、株式会社プレッパーズの高橋 豊様をお願いいたしました。元日本電子株式会社のメンバーでもあり、これまでに楽しいたくさんつながりを持たせてもらいました。パワフルな生き方をとても尊敬しています！

〔東京大学、2025年12月より日本電子株式会社

佐藤 宗太〕